

第 41 回日本二分脊椎研究会 参会記

北海道立子ども総合医療・療育センター

吉藤 和久

(2024 年 7 月 23 日)

第 41 回日本二分脊椎研究会が、北里大学病院脳神経外科 師田信人会長のもと、2024 年 7 月 6 日、東京ガーデンパレス（東京都文京区）で開催されました。1984 年に本会がスタートした目的は、集学的治療が欠かせない二分脊椎症について、各診療科やコメディカル間の横断的情報交換の場を設けることであったと伺っています。現在では、午後の部に限られますが、患者会である日本二分脊椎症協会も参加されます。患者視点からのフィードバックも得られる大変めずらしく、貴重な研究会と言えます。

第 41 回の特色は、これまでは各科の発表がセッションごとに別れる傾向にあったのですが、構成が改良された点でした。同一テーマのもとで各診療科の発表があり、より横断的であったと言えます。会長が挨拶で述べられたことそのままですが、今後ともこの方式が継続されると良いと感じました。そのほか、二分脊椎症協会との合同企画が充実していました。厚生労働省の担当官から行政面の話を伺えた点は、私の知る範囲では新しい企画だと思います。第 41 回の参加者は、整形外科、泌尿器科、小児外科、リハビリテーション科、産科、脳神経外科の医師、および看護師、臨床心理士等のコメディカルが 160 名、患者・家族、その他が 80 名であり、総数 240 名の参加があったようです。

シンポジウム 1 は「移行期医療としての二分脊椎症」がテーマでした。大学病院の立場から、小児病院の立場からという発表では、それぞれの問題点や工夫点が伺えました。診療面では、脳神経外科からは再係留、停止性水頭症、整形外科からは下肢変形、脊椎アライメント異常、小児外科からはライフスタイルに合わせた排便管理等について、移行期医療に関連した発表がありました。泌尿器科からの「親による導尿から自己導尿への変更も移行期である」という発表は、特に興味深く拝聴しました。

シンポジウム 2 は「二分脊椎：医学・医療の進歩」でした。2020 年から本邦で始まった二分脊椎胎児治療の臨床研究に関する経過報告が、産科、小児外科からありました。今後、本邦においても臨床上の治療選択肢となるはずであり、このような報告には常にアンテナを向けておきたいと思います。そのほか、胎児診断に関する豊富な経験と文献レビュー、世界の葉酸添加政策の現状についてなど、まとまった発表を聞くことができました。

招待講演では、自身が二分脊椎症患者であり、チャイルド・ライフ・スペシャリストとして活躍されている貴重な経験の発表を伺いました。医療者や社会が見落としがちで、特に心理的な面への配慮の大切さを感じました。

二分脊椎症協会合同企画では、患者 3 名ご本人から、治療で苦労した経験について、現在の活躍、今後の目標などの発表がありました。二分脊椎治療に携わる立場として、普段と違った角度から考える機会が得られたことが良かったと思います。

ランチョンセミナーでは、脳神経外科医にとって経験が少ないと思われる「二分脊椎症の脊椎変形に対する治療」について、手術適応や手技、問題点など、まとまった情報が得られました。

一般演題は4つのセッションからなり、外科治療、手術・脊髄係留、社会生活、移行期医療・連携医療というテーマでした。総数37演題とポリューム満点で、やはり各科・メディカル混在のセッションでした。演題内容は手術手技から褥瘡、性機能、子育てに関することまで幅広く、勉強になりました。

小生は共済セミナーとして、近年の髄液動態の考え方と水頭症シャントシステムについて述べる機会をいただきました。

とにかく暑い東京でしたが、有意義な一日でした。会長の師田信人先生、演者、フロアでご相談させていただいた先生方へ、お礼申し上げます。

